HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	元暁『涅槃宗要』訳注（一）
Author(s)	藤井, 教公
Citation	インド哲学仏教学論集, 1, 1-47
Issue Date	2012-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/hjiphb.1.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62107
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_p001-047_fujii.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

元暁『涅槃宗要』訳注（一）

藤井教公編著

一、はじめに

筆者は本務校である北海道大学文学部の学部演習において、平成二十二年四月より、受講生とともに元暁の『涅槃宗要』の講読を開始し、二年間続けて、ほぼ全体の三分の一を読んだ。この元暁撰『涅槃宗要』は、『大正新脩大蔵経』三十八巻に入蔵しているが、未だ国訳もされておらず、これまでの研究成果も極めて少ない[一]。そこで、東アジア仏教における大乗『涅槃経』の受容と解釈を検討する一助として本書を取り上げ訳注を作成することにした。学部の演習ではあるが、受講者にはあらかじめ分担範囲を決めて訳注原稿を作成してもらい、教場でその原稿を検討し、訂正や補いを施した。演習の期間は半期ごとに区切られているので、継続して参加した人もいるが、新規に受講する人、やめる人もいた。本稿は、平成二十二年度の前期と後期に受講者が分担作成した訂正原稿を集め、それに藤井が最終的に眼を通したものである。今回は読了した部分のうち、紙幅の都合で、『大正蔵経』テキストの三頁弱を載せるに止まった。年度末の慌ただしい時期に短時間に編集せざるを得なかったが、受講者の一人、丹野佑香氏に面倒な編集の労を担っていただいた。本稿は表記の不統一、注の重複などや、思わぬ過誤も多いと思われるが、本稿が日本で初の国訳であるという点で発表に意義があると考え、あえて刊行する次第である。原稿作成者は、以下の諸氏である。

佐々木恵脩（院生）、松浦未歩、佐藤圭、濱口涼子、森田政明、松原有吾、西野直人、高谷和明（院生）、福岡沙和、廣瀬　中、丹野佑香、芝田侑人、五十嵐大樹、西東大吾、酒井泰匡氏ら十五名。

二、『涅槃宗要』について

『涅槃宗要』は新羅の元暁（六一七～六八六）の撰。元暁は義湘とともに統一新羅で活躍した最も著名な仏教者で後に還俗したが、民衆教化に意を尽くした。彼の著作は数多いが、タイトルに『宗要』という名の付く元暁の現存する著作は本書以外に『法華宗要』や、『無量寿経宗要』『弥勒上生経宗要』『大慧度経宗要』などがあり、他の著作にしても経論の注疏類が多い。元暁の著作は八六部とされているが、その著作の数については確定しがたいようで[二]、それらの正確な著作年代の確定はさらに難しいようである[三]。彼の著作で法蔵の『起信論義記』に大きな影響を与えた『起信論疏』（『海東疏』）は法蔵の『義記』以前が成立の下限になるが、本書『涅槃宗要』中に引かれる諸師の説がそれぞれ誰のものかが同定できれば、本書についても成立時期の下限が推定できようが、本稿ではそこまでの検討に至っていない。

本書について、これまで講読した内容部分から指摘できる一、二の点を記せば、まず第一に浄影寺慧遠の影響の大きさである。慧遠の『大乗義章』や『大般涅槃経義記』の文を明らかに踏まえた表現が見られることから、述作の際の慧遠の影響の大きさを看取できる。このことはすでに木村宣彰氏によって指摘されていたことであるが、今回改めて確認された。

第二点は、世親の『法華論』の引用についてである。本書中には同論の引用が複数回見られるが、それらの引用は勒那摩提訳を依用しているという点である。周知のように、『法華論』の漢訳テキストには、勒那摩提訳と菩提流支訳の二種があるが、吉蔵の注釈書『法華論疏』は菩提流支訳に拠っており、中国仏教では菩提流支訳の依用が多い。この点、元暁は勒那摩提訳を用いる点に独自性が見られる。なお、同じ元暁の『法華宗要』にも『法華論』の引用が多く引かれるが、同じく勒那摩提訳を用いている点は変わらない。

本書の内容と構成の梗概を示すために大まかな分科を示すと、次のようである。

一、略述大意

二、広開分別

二―一　因縁を説く

二―二　教宗を明かす

二―二―一　涅槃門

二―二―一―一　名義門

二―二―一―二　体相門

二―二―一―三　通局門

二―二―一―四　二滅門

二―二―一―五　三事門

二―二―一―六　四徳門

二―二―二　仏性門

二―二―二―一　出体門

二―二―二―二　因果門

二―二―二―三　見性門

二―二―二―四　有無門

二―二―二―五　三世門

二―二―二―六　会通門

二―三　経の体を出す

二―四　教迹を明かす

右の通りであるが、『涅槃経』の内容について涅槃と仏性の二義を重視し解釈していることが知られる。

本書の『大正蔵経』テキストについて附言すると、テキストの底本は「天治元年写日光輪王寺蔵本」とあり、他の対校テキストはない。つまり、本書の写本はこれ一本しかなくて、孤本ということである。いま天治元年（一一二四）に写された日光輪王寺蔵本写本の由来について検討するいとまがないが、『大正蔵経』テキストを読むうち、経典の引用部分の中などに『大正蔵経』テキスト自身の誤りか、あるいは写本に由来する誤りなのか、それとも著者元暁自身に由るものなのか判然としないことが幾度かあった。

写本が見られればよいがと思っているうち、立正大学大学院博士課程の留学生、金慧鏡[四]氏から、韓国の元暁思想実践僧伽会刊行、慧峰尚泳監修・嘉恩謹訳『校訂国訳　涅槃経宗要』（二〇〇四年刊）の提供を受けた。同書は日光輪王寺写本影印を巻末に収録し、『大正蔵経』テキストとつきあわせて独自の批判テキストを提示しており、大変有用であった。しかし、『大正蔵経』テキストを訂正する際の根拠が判然としない箇所も見られる。本稿では同書に収録される写本影印と『大正蔵経』テキストを対照した結果、同テキストに不備の箇所があることが知られた。これらについては本稿の注部分に記した。

一　たとえば、木村 宣彰「元暁の涅槃宗要―特に浄影寺慧遠との関連―」（『仏教学セミナー』一九七七年十月）、李 平来「『涅槃宗要』の如来蔵説」（『印度学仏教学研究』三十巻、第二号、一九八二年三月）など。

二　福士 慈稔「元暁の著述に関する私見」（『印度学仏教学研究』五一巻第二号、二〇〇三年三月）。

三　伊吹 敦「元暁の著作の成立時期について」（東洋大学文学部インド哲学科編『東洋学論叢』通号三一号、二〇〇六年三月）。

四　同氏は元暁の『法華宗要』をテーマに博士論文を執筆中で、本書の訳注についても貴重な助言を得た。氏の成果に次のものがある。「元暁『法華宗要』訳注（1）」『大学院年報』（立正大学大学院文学研究科）、第二八号、pp.45-60、二〇一一年三月、「元暁『法華宗要』訳注（2）」『仏教学論集』（立正大学大学院仏教学研究会）、第二八号、pp.17-52、二〇一一年三月、「『法華宗要』の成立について」『印度学仏教学研究』（日本印度学仏教学会）、第六十巻第一号、pp.533-528、二〇一一年十二月。

三、凡例

一、本稿は『大正新脩大蔵経』巻三十八所収の元暁『涅槃宗要』のテキスト、二三九頁上段十三行目から二四一頁中段十八行目までの範囲の訳注を収める。

二、テキストの提示は『大正蔵経』テキストに準じたが、書き下し部分では新字体を用いた。

三、注番号は書き下し部分の当該語に付した。

四、書き下し部分における経文の引用には「」を付して引用範囲を示した。

五、現代語訳部分で、訳者の補いについては（　）で示した。

【テキスト】『大正蔵』巻三十八、p.239a l.15～b l.18

元暁師撰

是經有其二門。一者略述大意。二者廣開分別。述大意者。原夫涅槃之爲道也無道而無非道。無住而無非住。是知其道至近至遠。證斯道者彌寂彌暄。彌暄之故普震八聲通虛空而不息。彌寂之故遠離十相同眞際而湛然。由至遠故隨教逝之綿歷千劫而不臻。由至近故忘言尋之不過一念而自會也。今是經者斯乃佛法之大海方等之祕藏。其爲教也難可測量。由良廣蕩無崖甚深無底。以無底故無所不窮。以無崖故無所不該。統衆典之部分歸萬流之一味。開佛意之至公和百家之異諍。遂使擾擾四生僉歸無二之實性。夢夢長睡並到大覺之極果極果之大覺也。體實性而忘心實性之無二。混眞忘而爲一。既無二也。何得有一眞忘混也。孰爲其實。斯即理智都忘名義斯絶。是謂涅槃之玄旨也。但以諸佛證而不位。無所不應無所不説。是謂涅槃之至教也。玄旨已而不嘗寂。至教説而未嘗言。是謂理教之一味也。爾乃聽滿字者咸蒙毛孔之益。求半偈者不傾骨髓之摧造逆罪者信是經而能滅。燋善種者依茲教而還生之矣。所言大般涅槃經者。若也具存西域之音。應謂摩訶般涅槃那。此土譯之言大滅度。欲明如來所證道體周無外。用遍有情廣苞遠濟。莫是爲先依莫先義。故名爲大體大用無二無別。既無彼崖可到。何有此崖可離。無所離故無所不離乃爲大滅。無所到故無所不到方是大度。以是義故名大滅度。所言經者。大聖格言貫十方而一揆。歷千代而莫二法。而且常故名爲經。正説之前先序時事。以之故言序品。第一故導大般涅槃經序品第一。

【書き下し】

是の経にその二門有り。一には大意を略述し、二には広く分別を開く。

大意を述ぶとは、原（もと）より夫れ涅槃の道[一]たるや、道無くして道に非ざる無し。住無くして[二]住に非ざる無し。是れ、その道の至近にして至遠なるを知り、斯の道は弥寂にして弥暄[三]なるを証す。弥暄の故に普く八声[四]を震わせ虚空に通じて息まず。弥寂の故に十相[五]を遠離して真際[六]に同じて湛然たり。至遠に由るが故に教に随い之を逝くに綿歴すること千劫にして臻らず。至近に由るが故に言を忘れて[七]之を尋ぬること一念に過ぎずして自ずから会す也。

今、是の経は斯れ乃ち仏法の大海、方等[八]の秘蔵なり。其の教たるや測量すべきこと難し。良（まこと）に広蕩、無崖、甚深、無底なるに由る。無底[九]なるを以ての故に窮まらざる所無し。無崖なるを以ての故に該ねざる所無し。衆典の部分を統べ万流の一味に帰す。仏意の至公を開いて百家の異諍を和す。遂に擾擾（じょうじょう）の四生[一〇]をして無二の実性に僉（みな）帰さしむ。夢夢、長睡、並びに大覚の極果に到る。極果の大覚たるや実性を体して忘心す。実性の無二は真忘を混じて一と為す。既に二無きなり。何ぞ一の真忘混ずること有らんや。いずれをかその実と為すや。斯れ即ち理智都て忘じて、名義斯れ絶す。是れを涅槃の玄旨と謂う也。但だ諸仏の証を以て位せず。応ぜざる所無く説かざる所無し。是れを涅槃の至教と謂う也。

玄旨已でにして嘗て寂せず。至教説いて未だ嘗て言わず。是れを理教の一味と謂う也。爾して乃ち満字[一一]を聴く者は咸く毛孔の益を蒙り、半偈を求むる者は骨髄の摧を傾けず。逆罪を造る者は是の経を信じて能く滅す。善種を燋せる者は茲の教に依りて還たこれを生ずるなり。言う所の大般涅槃経とは、若しや具さに西域の音を存せば、応に摩訶般涅槃那と謂うべし。此の土に之を訳して大滅度と言う。如来所証の道は体周く無外なるを明かさんと欲す。用遍く、有情広く苞み、遠く済う。是れを先と為さざれば、依るに先の義無し。故に名づけて大と為す。体大に用は無二にして無別なり。既に無なれば、彼の崖の到るべきなし。なんぞ此の崖の離るべき有らんや。離する所無きが故に離せざる所無きを乃ち大滅と為す。到る所無きが故に到らざる所なし。方に是れ大度なり。是の義を以ての故に大滅度と名づく。

言う所の経とは、大聖の格言にして、十方を貫いて一揆なり。千代を歴して二法なし。而して且つ常なるが故に名づけて経

と為す。正説の前に先に時事を序す。之を以ての故に序品と為す。第一なるが故に大般涅槃経序品第一と導う（導＝道）。

【現代語訳】

この経には二つの面からのアプローチが考えられる。一には大意を略述し、二には広く考察を加えるの二つである。大意を略述するとは、もとより涅槃に到る道たるや、道なぞどこにも無いと言えるし、すべてが道であるとも言えよう。拠り所なぞどこにもないが、同時にすべてが拠り所であるといえよう。その道が（涅槃に）最も近いものであると同時に最も遠いものであることを知り、その道がますます寂静なものであると同時にますますにぎやかなものであることを覚る。ますますにぎやかだからこそ八種の声調の声を虚空にひろく響かせ、ますます寂静だからこそ、十種のありようを離れて真理に同じ、静まりかえっているのである。最も遠いからこそ、教えに随ってこの道を行くに、どこまでも続き、千劫を経ても到達することができない。最も近いからこそ（教えの）言葉を忘れて道を追求するに、一瞬の間に自得するのである。

いま、この『涅槃経』は仏法の大海にして、大乗の秘密の（教えの）蔵である。その教えは測ることは困難である。それほど広々としていて果てしがなく、非常に奥深く、底なしである。底なしなので（かえって）窮まらないところがない。果てしがないので収め尽くさないところがない。多くの経典のそれぞれの部分を統一して、すべての流れが収束して一つの流れになるように、一つの（教えの）味に帰一する。仏の意趣が万人に開かれたものであることを示して百家の諍いを和すのである。そして最終的には騒がしい衆生をただ一つの真実の本性に帰入せしめる。夢を見続けて醒めない輩、長い眠りから覚めない輩、彼らも究極の大いなる覚りという結果に到るのである。その究極のおおいなる覚りたるや、真実の本性をその本質としていて、心のはたらきなどはもはや抜け落ちている。真実の本性がただ一つというのは、真実と虚妄とが混じて一つになっているのである。既に一つになっているのであれば、もう一つの真実と虚妄とが混じるということなぞありえない。（真と妄とが一になっているその）どちらを真実となすべきであろうか。それは真理と智慧とが混然と一体となり、名称も意義も超越しているのである。これを涅槃の奥深い意趣（玄旨）というのである。ただ仏たちの覚りを位置づけたものだけではなく、（衆生のはた

らきかけ）に応じないことはなく、教えを説かないことはないのである。これを涅槃の教えの至り（至教）というのである。

玄旨はこれまでに冥寂したことはなく、至教はこれまでに教として説かれたことはなかった。これを理と教の一味というのである。

そうであるから完全な教えを聴く者は、皆ほんの髪の毛の穴ほどの利益を蒙り、不完全な偈を求める者は、骨髄が砕けるような努力を傾けることもない。五逆罪を造る者も、この『涅槃経』を信じることによってその罪を消滅させることができ、善の種を焼いてしまった者も、この経によって再び生じさせることができるのである。

言うところの『大般涅槃経』とは、もし西域の音を詳しく残せば「摩訶般涅槃那」というべきである。中国でこれを訳して「大滅度」というのである。如来が証得した覚りは、その本質は隅々まで行きわたり、内外のないことを明かそうとするのである。その覚りの働きは全周的で、衆生はその内に広く包摂され、遠く救済されるのである。これを先としなければ、依拠すべき（先後の）先という意義はなくなってしまう。それゆえ名づけて「大」とするのである。（覚りの）本質は大きく、その働きは無二にして別物はない。無二であるならば到達すべき悟りの彼岸もない。ならばどうして離れるべき迷いの此岸があろうか。離れるべき所が存在しないから離れない所がないというのを「大滅」（大いなる滅）とし、到達すべき所が存在しないから到達しない所がない。まさにこれこそが「大度」（大いなる渡り）である。このような意義によって「大滅度」というのである。

言う所の「経」とは、偉大な聖人の格言であり、十方に通じて同一の趣旨である。幾時代をも超え、二種の教法は存しない。そうしてまた常住な存在であるから「経」と名づけるのである。本論となる説法の前に先に説法の時や状況について説いて序としたのである。このようなことから序品とするのである。第一番目なので、『大般涅槃経』序品第一というのである。

一　道は目的のための手段の意だが、仏典漢訳の当初、「覚り」（bodhi）の訳語として用いられた。ここでも涅槃に到る「道」の意のほかに、涅槃という「覚り」の意味でも解釈しうる。

二　住無くして　「無住」は『維摩経』を踏まえる。同経「観衆生品」に「又問。顛倒想孰爲本。答曰。無住爲本。又問。無住孰為本。答曰。無住則無本。文殊師利。從無住本立一切法。」（『大正蔵』巻十四、547c）〈又問う。顛倒想は孰れを本と為すや。答えて曰く、無住を本と為す。又問う。無住は孰れを本と為すや。答えて曰く、無住ならば則ち本無し。文殊師利よ、無住の本より一切法を立つるなり〉

三　音はケン。あたたかい、の意。「寂」の反対語ならば「喧」の字がふさわしい。テキストの錯誤か。

四　八声　『菩薩瓔珞経』などには「復以八聲震動十方無量佛國悉令聞知」（『大正蔵』巻十六、119b14）と用例があるが、詳細は未検。

五　十相　未検。

六　真際　真実の極み、真理のこと。、真如の同義語。

七　言を忘れて　「亡言」は『荘子』を踏まえての表現。『荘子』外物篇に「荃者所以在魚。得魚而忘荃。蹄者所以在兔。得兔而忘蹄。言者所以在意。得意而忘言」〈筌とは魚を在うる所以、魚を得て筌を忘る。蹄は兔を在うる所以、兔を得て蹄を忘る。言は意を在うる所以、意を得て言を忘る〉とあるによる。

八　方等　大乗のこと。vaipulya の訳語。

九　無底　空間的に限定されないこと。奥深く思惟を超えていることの意で、禅宗では執着を離れた状態を表現する語として多用される。

一〇　四生　有情（衆生）の生まれ方としての、卵生、濕生、胎生、化生をいい、衆生全体を表す語として使われる。

一一　満字　完全な教え、了義のこと。『涅槃経』に出る。半字はその反対語、不了義のこと。

【テキスト】『大正蔵』巻三十八　p.239b 1.18~p.239c 1.8

二者廣開之内有其四門。初説因緣。次明教宗。三出經體。四辨教迹。第一説經因緣門者。問佛臨涅槃而説是經。爲有因緣爲無因緣。若無因緣亦應無説。若有因緣有爲幾種。答佛説是經無因無緣。所以然者。所説之旨絶於名言不開因緣故。能説之人離諸分別不思因緣故。無因強説是經。如此下文言。如拉羅婆夷名爲食油。實不食油強爲立名字爲食油。是大涅槃亦復如是。無有因緣強立名字。又攝論云。若佛果是無分別智所

顯離分別。衆生。云何得作衆生利益事。如理
無倒爲顯無功用作事。故重説偈言。譬摩尼
天鼓無思成自事。如是不分別種種佛事成。
解云。若依是義無因緣而有所説。又復得言
無因緣故亦無所説。如是經下文言。若知如
來常不説法是名菩薩具足多聞。二夜經云。
從初得道夜乃至涅槃夜是二夜中間不説一
言字。以是證知無因無説。或有説者。有大因
緣佛説是經。所以然者。如愚癡人都無因緣
有無所作。智者不爾。

【書き下し】

二には広開の内に其の四門あり。初めに因縁を説く。次に教宗[一]を明かす。三には経の体[二]を出だす。四には教迹[三]を弁ず。第一に経を説く因縁とは、問う。仏、涅槃に臨みて是の経を説く。因縁有りとや為ん、因縁無しとや為ん。若し因縁無くんば、また応に説無かるべし。若し因縁あらば、幾種を為すこと有るや。答う。仏、是の経を説くこと無因にして無縁なり。然る所以は、所説の旨名言を絶して、因縁を開かざるが故なり。能説の人、諸の分別[四]を離れて因縁を思わざるが故なり。因無くして強いて是の経を説く。

此の下の文に言うが如し。「拉羅婆夷[五]を名づけて食油と為すが如し。実に油を食せざるを強いて名字を立つることを為して食油と為す。この大涅槃もまたまた是の如し。因縁有ること無くして、強いて名字を立つ」と。また摂論に云く。「若し仏果[六]はこれ無分別智[七]の所顕にして、衆生を分別するところを離るれば、云何が衆生利益の事を作して、理の如くにして倒すること無きを得んや。無功用[八]の作事[九]を顕さんが為の故に重ねて偈[一〇]を説いて言く。譬えば摩尼[一一]と天鼓[一二]とは思[一三]無くして自ら事を成ず。是の如く分別[一四]せずして種種の仏事[一五]は成ずるなり[一六]」と。解して云く。もし是の義に依らば、因縁無くして所説有り。又た復た因縁無き故に亦た所説無しと言うを得。是の経の下の文に言うが如し。「若し如来常に法を説かずと知らば、是を菩薩[一七]は多聞を具足[一八]すと名づく[一九]」と。二夜経に云く。「初めて道を得たる夜従り、乃ち涅槃の夜に至るまで、是の二夜の中間には一言の字も説かず[二〇]」と。是れを以って無因無説を證知[二一]す。

或いは有るの説くとは、大因縁有りて、仏是の経を説く。然る所以は、愚癡人[二二]都て因縁無くして無所作[二三]有るが如し。智者は爾らず。

【現代語訳】

第二に、広く考察を加える部分を四段とする。一段目は経の説かれた因縁（いわれ）を述べる。二段目は教えの中心となる点を明かす。三段目は経の本質について説く。四段目は言教について説く。

これらの四段のうち、まず経の説かれた因縁について述べる。問う。仏（釈尊）は入般涅槃を前にしてこの経を説く。その因縁は有るのか、無いのか。もし因縁が無ければ経を説くことはなかったであろう。もし因縁があれば、その因縁は何種類かあるのか。答える。仏はこの経を因縁無く説いた。その理由は、説かれた内容が言語を超越していて因縁について説明しないからである。また仏は分別することがないため、因縁について考えないからである。よって因も無く（直接的な原因によらず）、強いてこの経を説いたのである。

『大般涅槃経』で以下の文のように言われている。「拉羅婆夷を食油と名づけるようなものである。実際は油を食べないものに対して強いてそのように名づけたのである。大涅槃という語もこれと同じである。つまり、因縁が無いのにも関わらず、強いてそのように名づけられたのである。」また、『摂大乗論』に次のように説かれている。「もし仏の位は無分別智であって衆生を分別することがなければ、どのように衆生利益をなして、正しい道理に従って顛倒することがないのであろうか。無功用の作事（意思的努力を加えない働き）を顕らかにするための故にさらに偈を説いて言う。たとえば珠玉と天鼓とはたくまずして自然に作用する。このように、理解させるよう説明することなく、種種の仏の教化は達成されるのである」と。解釈していうには、このことに依るならば、因縁無くして説かれたのである。また、因縁が無いからこそ説かれないとも言うことができる。この経の下の文に言う。「もし如来は常に法を説かないということを知ったなら、これを、菩薩が多く聞くということを具えていると名づける」と。『二夜経』に言うには、「（釈尊が）初めてさとりを得た夜より、涅槃に至った夜に至るまで、こ

の二夜の間には一言の教えも説いていない」と。これによって、因縁がないからこそ説かれないのだとわかるのである。あるいは有る人が説くには、説かれることがあるとは、大いに因縁があり、仏はこの経を説いたのである。その理由は、愚かな人にはみな因縁なくなすべきことがないようなものである。智者はそうではない。

一　宗（むね）　中心となるもの。
二　体　働きのもととなる実体。本質。
三　教迹　仏の説かれた教えのあと。言教。
四　分別　心の働きが対象を思惟し、計量すること。あれこれ判断すること。
五　拉羅婆夷　tailapāyika の訳語。ゴキブリの意。原文では「拉羅婆夷」でなく「抵羅婆夷」となっている。『大般涅槃経』（『大正蔵』巻十二、p747b ll.16～19）「如抵羅婆夷名爲食油。實不食油。強爲立名。名爲食油。是名無因強立名字。善男子。是大涅槃亦復如是。無有因縁強爲立名。」
六　仏果　修行の因によって達せられる仏の位。
七　無分別智　主観、客観の相を離れて平等に働く真実の智慧。概念的思惟を超えた真実智。
八　無功用　自然のままでなんらの造作、意志的努力を加えないこと。（功用　努力。身口意の動作。働き。作用。）
九　作事　活動。なすべきことを実行する。働き。目的を達成すること。
一〇　偈　gāthā の音写といわれる。また伽陀とも音写する。経・論などのうちで、仏の教えを詩句によって述べたもの。あるいは仏・菩薩の徳をたたえた詩句。
一一　摩尼　maṇi の音写。珠・宝・離垢・如意と漢訳する。珠玉の総称。／如意珠。※摩尼珠　珠玉の総称。宝珠。珠玉は悪を去り、濁水を清らかにし、災難をさける徳があるとされる。／振多摩尼の略。如意珠をさす。また、如意珠に譬えられる仏性のことをいう場合もある。
一二　天鼓　忉利天の善法堂にある鼓。打たなくても、おのずから妙音を発するという。
一三　思　心の動機づけの作用。心がある方面に動機づけられること。／心の造作、意のはたらきと解せられる。志向。思考。五遍行の心所の一つ。身・語・意の三業をつくる心作用であり、業の体。

一四 分別　あれこれ分けて考えること。／人びとに理解させるように分けて説く。／正しい智慧のはたらきについていう。／知識をもってする理解。対象を思慮すること。

一五 仏事　仏のなすべき仕事、仏の教化をさす。衆生を救う事業活動。仏の所作。

一六 『摂大乗論釈』（世親釈、真諦訳）（『大正蔵』巻三十一、**p.243a ll.2~7**）

「若佛果是無分別智所顯離分別衆生。云何得作衆生利益事。如理不倒。爲顯無功用作事。故重説偈

論曰

譬摩尼天鼓　無思成自事　如此不分別　種種佛事成」

一七 菩薩　**bodhi-sattva** の音写。さとりの成就を欲する人。さとりの完成に努力する人。仏になろうと志す者。

一八 具足　具えていること。具わり、満ち足りていること。

一九 『大般涅槃経』（『大正蔵』巻十二、**p.520b ll.8~9**）

「是事若知如來常不説法。亦名菩薩具足多聞。」

二〇 『二夜経』については詳細未検。ただし、『大智度論』他、多くの典籍で「二夜經」の語が見られる。

たとえば、『大智度論』（『大正蔵』巻二十五、**p.59c ll.5~7**）には次のようにある。

「人不聞法。凡人著於我。又佛二夜經中説。佛初得道夜至般涅槃夜。是二夜中間所説經教。一切皆實不顛倒。」

二一 證知　はっきりと知ること。

二二 愚癡人　愚かな人。

二三 所作　義務。（修行者の）なすべきこと。／身・口・意の三業を能作と解すのに対し、それが発動することをいう。

【テキスト】**p.239c ll.8~23**

有深所以乃有所作。如

智度論云。譬如須彌山王不以無因緣及小因

緣而自動作。諸佛亦爾。不無因緣而有所説。

依是文意有因有説。若依是意説此經因有

總有別。別而論之因緣無量。所以然者。大人

發言必不徒説。一偈一句各有因緣。一言之

内亦有衆縁。此經梵本有二萬五千偈則有
二萬五千因縁。隨其一偈皆有四句。則十萬
句有爾許因縁。又一一句各有諸縁。由是言
之有無量縁。別縁如是不可具陳。總因縁者
如來宜以大因縁而説是經。所謂欲顯諸佛
出世之大意故。如法花經言。諸佛如來唯以
一事因縁故出現於世乃至廣説。又此經菩
薩品云。若有人能供養恭敬無量諸佛。方乃
得聞大涅槃經。所以者何。大徳之人乃能得
聞如是大事。

【書き下し】

深き所以有りて乃ち所作[一]あり。『智度論』[二]に云うが如し。「譬えば、須弥山王[三]の無因縁及び小因縁を以てすれども自ら動作せざるが如し[四]」と。諸仏も亦た爾り。因縁無くして所説有らず。是の文の意に依らば因有りて説有り。若し是の意に依りて比の経の因を説かば総有り別有り。別して之を論ずれば因縁無量なり。然る所以は、大人[五]言を発するに必ず徒に説かず。一偈一句に各因縁有り。一言の内に亦た衆くの縁有り。此の経の梵本に二萬五千偈有れば、則ち二萬五千の因縁有り。其の一偈に随って皆四句有り。則ち十萬句に爾許の因縁有り。

又一一の句に各諸の縁有り。是れに由りて之を言わば、無量の縁有り。別縁は是くの如く具さに陳ぶべからず。総の因縁は、如来宜しく大因縁を以て是の経を説きたもうべし。所謂諸仏出世の大意を顕さんと欲するが故なり。法華経に言うが如し。「諸仏如来は唯一事の因縁を以ての故に世に出現したもう[六]」と。乃至広説せば、又此の経の菩薩品に云く、「若し人有りて、能く無量の諸仏を供養[七]し恭敬[八]せば、方に乃ち大涅槃経を聞くことを得ん。所以は何ん。大徳[九]の人は乃ち能く是くの如きの大事[一〇]を聞くことを得[一一]」と。

【現代語訳】

深い理由があって、なすべきことがあるのである。『大智度論』で言われていることと同じである。「ちょうど、須彌山王が

因縁なくしては、あるいは小因縁によっては自ら動かないことと同じだ」と。諸仏もまたそのようである。因縁がなければ、教えが鋭かれることはない。この文（大智度論）の意味するところによるならば、因縁があって説くことがあるのである。もしこの意によって、この経を説いた因縁について説くならば、総論と各論がある。個別に論ずると、（涅槃経が説かれた）因縁の数は限りがない。その理由は、転輪王や仏などの偉大な人物は教えの言葉を無駄に発することはないからである。一偈一句にそれぞれ因縁がある。一つの言葉の中にまた多くの因縁がある。この経のサンスクリットテキストには、二万五千の偈があり、それはつまり二万五千の因縁があるということである。その一つの偈の中に、それぞれ四つの句がある。つまり、十万句に多くの因縁がある。

また一つ一つの句にそれぞれ多くの因縁がある。これに従って言うならば、無量の因縁があることとなる。各論の因縁は以上のごとく（無量なので）詳しく述べることはできない。総論での因縁は如来は大因縁によってこの経を説かれたのであろう。いわゆる多くの仏が、世に出現されることの目的を表そうとするからである。『法華経』で次のように言うがごとくである。「多くの仏、如来はただ一つの大事ないわれのみの故に世に出現される。」と。さらに広説すれば、また、この経（涅槃経）の菩薩品に次のようにある。「もし、数え切れないほどの仏を供養し敬えば、すなわち、大涅槃経を聞くことができるだろう。それはなぜか。たくさんの功徳を積んだ人は、（つまりその功徳で）仏の大事（な説法）を聞くことができるからである。」

一　所作　なすべきこと。行い。ふるまい。つくられたもの。

二　『智度論』（竜樹著）大乗仏教の初期の論書であり、大品般若経を逐条的に解釈した注釈書。

三　須弥山　古代インドのコスモロジーによれば、世界の中心に高くそびえる巨大な山。

四　『大智度論』（『大正蔵』巻二十五、p.57c l.25）
「譬如須彌山王不以無事及小因縁而動。」

五　大人　転輪王、または仏・菩薩をいう。立派な人。

六　『妙法蓮華経』鳩摩羅什訳（『大正蔵』巻九、p.7a l.21~l.23）

「唯以一大事因縁故出現於世。舎利弗。云何名諸佛世尊。唯以一大事因縁故出現於世。」

七　供養　奉仕すること。尊敬をもって仕え、世話すること。

八　恭敬　敬い、つつしむこと。尊敬。仰ぎ見ること。

九　大徳　徳ある人。徳行のある者の意。

一〇　大事　法華経では、一大事因縁の略。最も大切なこと。／仏がこの世に出現したことの意味。釈尊がこの世に出現したただ一つの目的。ひいては修行の眼目。修行して悟りを開くこと。ただし、ここでの「大事」とは、仏が涅槃経を説くことを指す。

一一　『大般涅槃経』（『大正蔵』巻十二、p.658c ll.17~20）

「若有人能供養恭敬無量諸佛。方乃得聞大涅槃經。薄福之人則不得聞。所以者何。大徳之人乃能得聞如是大事。」

ただし、「薄福之人則不得聞。」の一文は『涅槃宗要』では省略されている。

【テキスト】p.239c l.23~p.240a l.1

何等爲大。所謂諸佛甚深祕藏
如來之性。以是義故名爲大事。解云。今説是
經之時正臨一化之終日究意顯示諸佛大意。
所謂總括成道以來隨機所説一切言教。悉
爲示一味之道。普令歸趣無二之性。十方世
一切諸佛悉同是意無二無別。是謂諸佛出
世大意。是名如來甚深祕藏。由有如是一大
因緣。是故如來説是大經。

【書き下し】

「何等をか大と為す。所謂諸仏の甚深秘蔵如来の性なり。是の義を以っての故に、名づけて大事と為す一」と。解して云く。今是の経を説く時、正に一化の終日に臨みて、意を究め諸仏の大意を顕示す。所謂成道二以来の機三に随う所説の一切の言教を総括し、悉く為に一味四の道を示し、普く今無二の性に帰趣す。十方の世の一切の諸仏悉く是を同じくして意に二無く別無

し[五]。是れを諸仏出世の大意と謂う。是れを如来甚深の秘蔵と名づく。是くの如きの一大因縁有るに由りて、是の故に如来是の大経を説く。

【現代語訳】

「何をもって〈大〉とするのか。それはいわゆる仏陀達の深奥な秘密の教えである仏陀になる可能性（仏性）である。この意義によって、大事と言うのである。」解釈して言うには、今この経を説く時、釈迦仏の教化の終わりの日に臨み、意を究めて仏性を示すのである。いわゆる成道以来（仏が）相手の素質に応じて説かれた一切の教えを総括し、悉く全て平等な（仏の）道を示し、広く今ただ一つの本性に趣くのである。十方世界の一切の諸仏もこれに同じくして、その意義に二つなく別のものはない。これを諸仏が世に出現する大きな意趣と言う。これを如来の甚深の秘蔵と名づける。このような一つの大きないわれが有ることによって、この故に如来はこの大般涅槃経を説かれたもうのである。

一　『大般涅槃経』（『大正蔵』巻十二、p.658c ll.21~22）
「何等爲大。所謂諸佛甚深祕藏如來性是。以是義故名爲大事。」

二　成道　悟り。悟りを開くこと。／釈尊が菩提樹下で諸の魔を伏し、悟りを完成したことをいう。／如来が言語によって示した教え。言い表し。

三　機　機根のことを指す。
機根　教えを聞いて修行をし得る能力。／衆生の根性・性質。

四　一味　事（諸現象）または理（本質）の平等であることを、海水のすべてが同一の塩味であることに喩える。また、無差別であること。

五　無二無別　対立も差別もないこと。／別々のものではないこと。

【テキスト】p.240a ll.1~8

如是總門一大因　　依經典不相妨故。雖非不然故說有無無而
緣即攝別門無量因緣。以其衆緣不出一意。　　非定然故不相違。說經因緣應如是知。第二
問彼初師義無因無說。此後師意有因有說。　　辨教宗者。此經宗旨說者不同。有師說言。經
如是二說何得何失。或有說者。二說悉得。皆　　文始終所詮衆義以爲經宗。

【書き下し】

是くの如く総門の一大因縁は即ち別門の無量因縁を摂す。其の衆くの縁を以てすとも一意を出でず。問う、彼の初師の義は因無くして説無し。この後の師の意は因有りて説有り。是くの如きの二説は何れの得、何れの失ならん。或いは有るの説くは、二説悉く得と。皆経典に依りて相い妨げざるが故なり。然らずに非ざるが故に有無を説くと雖も、無にして定んで然るに非ざるが故に相い違わず。経の因縁を説くこと応に是くの如く知るべし。

第二に教宗[一]を弁ずとは、この経の宗旨[二]、説かば不同なり。有る師の説いて言わく。経文の始終の所詮の衆くの義、以て経宗[三]と為すと。

【現代語訳】

このように総論の一大因縁は各論の無量の因縁を含んでいる。それら多くの因縁があってもただ一つの意趣を出ない。問う、かの最初の師の意義は因が無ければ説法することは無いという。この後の師の考えは因が有って説法があるという。このような二つの説はどの点で正しく、どの点で誤っているのか。あるいはある説では、二つの説はどちらもすべて正しい。（これら二説は）皆経典に依っており、どちらの説もお互いに矛盾せず同時に成り立つものだからである。（これらの説がすべて正しいということは）そのとおりであるから、有因・無因を説いていると言っても、無であってもはっきりとそうだと言っている

わけではないので両者は違わない。経の因縁を説くことはまさにこのようであると知るべきである。

第二に教旨を説くとは、この経の要点を説くならば、同じではない。ある師が説いて言うには、経全体で書かれていることの多くの教義をその経の本旨とすると。

一　教宗　教え。

二　宗旨　根本の趣意。一つの宗派の教理や宗義の要旨。

三　経宗　或る経典に説かれた教えの骨格となっている主要点。（中村元『広説仏教語大辞典』より）

【テキスト】p.240a ll.8~15

對問而言。即有
六六三十六義。所謂第一長壽因果乃至最
後諸陰法門。或有説者。四種大義爲此經宗。
何等爲四。一者大涅槃圓極妙果具足三事
及與四德。二者一切衆生悉有佛性。煩惱覆
故不能見。三者三寶佛性同體無二。四者闡
提謗法執性二乘。悉當作佛。如是四義以爲
其宗。

【書き下し】

問いに対して言わく。即ち六六三十六義有り。所謂第一の長寿の因果より乃ち最後の諸陰一の法門に至る。或いは有るの説くは、四種の大の義を此の経の宗と為す。何等をか四と為す。一には、大涅槃の円極二の妙果三は三事四及び四徳五を具足す。二には、一切衆生悉有仏性六。煩悩覆うが故に見ること能わず。三には、三宝と仏性七は同体にして無二なり。四には、闡提八の謗法九、執性の二乗一〇も、悉く当に仏と作るべし。是くの如き四義、以て其の宗と為す。

【現代語訳】

問いについて言う。すなわち六六、三十六の意義がある、と。つまり、第一の（仏の）長寿の意義から、最後の五蘊の集まりとしての身心の法門までである。ある人が説くには、四種類の大の意義をこの経の旨となす、と。四種類とは何か。一には、大般涅槃という円満至極のすばらしい結果は、（戒・定・慧の）三つと（常・楽・我・浄の）四つの徳性を具えている。二には、生きとし生けるものは、すべて生まれながらにして仏になりうる可能性を有している。煩悩が覆っているために仏性を見ることができないのである。三には、（仏・法・僧の）三宝と仏性とが、同一体にしてただ一つである。四には、一闡提の経の誹謗者も、それぞれの本性にとらわれる（声聞と縁覚の）二乗もみな、すべて仏となる。以上の四つの意義を、その本旨となすのである。

一 諸陰　個体、個人存在を意味する。「陰」は「蘊」のことで，五蘊をいう。

二 円極　円満至極。円満であり、究極に達すること。

三 妙果　みごとな結果。妙因・妙行によって得た証果。すなわち仏果。さとり。すぐれた最上の境地。

四 三事　戒・定・慧の三学。
戒　つつしみ。戒め。行いをつつしむための戒め。戒めを守る。仏教に帰依した者が守るべき行いの規則。道徳。
定　瞑想。静かな瞑想。心の安定。心の安らぎ。心の動揺を静めること。
慧　道理を選び分ける判断をする心作用。分別判断。分別し判断する心作用。事物や道理を認知・判断・推理する精神作用。よく分別する思慮。

五 四徳　四つのすぐれた性質。さとりの四つの徳、または境地。ニルヴァーナの四つの属性をいう。『涅槃経』では常・楽・我・浄の涅槃の四徳を説く。

六 一切衆生悉有仏性　生きとし生けるものはすべて生まれながらにして仏となりうる可能性（仏性）がある、という意。

七 仏性　仏の性質。仏としての本性。覚者（仏）となりうる可能性。大乗仏教ではこれがすべての人間、または存在に具わっているという。

八 闡提　一闡提（icchantika）の略。原義は、欲望をいだく者。断善根者。信不具足とも訳される。生死を欲して出離を求めない者。不成仏。成仏する素質・因縁をもたない者。『涅槃経』では経の誹謗者で、「一切衆生悉有仏性」の唯一の除外例として記される。

九　謗法　仏法を誹謗すること。仏の教えをそしり、正しい真理をないがしろにすること。最大の罪の一つ。

一〇　二乗　声聞乗と縁覚乗の二つをいう。乗は、乗り物の意。声聞とは、師の教えによって悟る人で、仏の教えを直接聞き、四諦の道理によってさとる人たち、およびその立場をいう。縁覚とは、理性を体得して自らさとる人で、仏の教えによらず、ひとりで十二因縁の道渥を観察してさとる人たち、およびその立場をいう。大乗の人たちからいえば、この二種の人たち、およびその立場は自己の完成にとどまって、多くの他人の救済に向かわないから、劣った立場であるとみるのである。

【テキスト】p.240a ll.15~22

或有説者。出世因果以其爲宗。果即菩提涅槃。因即佛性聖行。如能陀章開菩提果。哀歎章中開涅槃果。如來性品顯佛性因。聖行品中説行徳因。其餘諸品重顯因果。故知無上因果爲宗。或有説者。當常現常二果爲宗。所謂一切衆生悉有佛性。是顯當常如來所證大般涅槃。是明現常聖行等因即助顯於果非爲正宗。

【書き下し】

或いは有るの説くは、出世の因果其れを以て宗一となすと。果はすなわち菩提涅槃なり。因はすなわち仏性聖行二なり。よく陀章の菩提の果を開く三が如く、哀歎章中に涅槃の果を開く。如来性品は仏性の因を顕す。聖行品中に行徳四の因を説く。其の余の諸品重ねて因果を顕す。故に無上の因果を宗と為すことを知る。或いは有るの説くは、まさに当常と現常の二果を宗と為すと。いわゆる一切衆生悉有仏性とは、是れ当常を顕し、如来が証する所の大般涅槃五は是れ現常を明かす。聖行等の因は、即ち果を助顕す。正宗六と為すに非ざるなり。

【現代語訳】

ある説では、仏が世に現れた原因と結果を本旨となす。結果とは悟りと涅槃である。その原因とは仏性と聖行である。純陀品が悟りという結果を説いているように、哀歎品に涅槃という結果を説明するのである。如来性品は仏性という原因をあらわし、聖行品中には修行の特性という原因を説いている。その他の諸品は重ねて原因と結果をあらわしている。だから最高の原因と結果とが本旨だと知るのだ。

またある説では、実現されるべき常住性と現在の常住性とを本旨としている。所謂一切衆生悉有仏性とは、実現されるべき常住性であり、如来が体得した偉大な涅槃は現在の獲得されている常住性を明かしている。また清らかな行などの原因は結果を助けあらわし出すものであるから、正しい本旨とはしないのである。

一　宗　根本の原理。
二　聖行　涅槃経に説く、五行の一つ。菩薩が修する戒・定・慧の行。
三　開菩提果　菩提という結果について解説するの意。
四　行徳　仏道を修行した結果、身に具わった徳。
五　大般涅槃　すぐれて完全なさとりの境地。また釈尊の偉大な死をいう。
六　正宗　釈尊から代々の祖師達が連綿と正しく伝えてきた正しい宗旨。

【テキスト】p.240a 1.22~p.240b 1.10

若據佛意欲使衆生各證當　名涅槃也。或有説者。圓極一果爲是經宗。所
果。但當果未非恐難取信。是故自説所證將　謂諸佛大般涅槃。所以從宗而立題名。瓔珞
成物信。以是義故二果爲宗。但從現立題故　經六種瓔珞爲宗。大般若經三種般若爲宗。

當知是涅槃經一大涅槃爲宗。或有説者。諸佛祕藏無二實性以爲經宗。如是實性離相離性故於諸門無障無礙。離相故不垢不淨非因非果不一不異非有非無。以離性故亦染亦淨爲因爲果亦一亦異爲有爲無爲。染淨故或名衆生或名生死。亦名如來亦名法身。爲因果故或名佛性名如來藏或名菩提名大涅槃。乃至爲有無故名爲二諦。非有無故名爲中道。由非一故能當諸門。由非異故諸門一味。如是無二祕藏以爲是經宗旨。但其題目之中不能並偏存諸名。且隨時事立涅槃名。

【書き下し】

若し仏の意欲に拠らば、衆生をして各当果[一]を証せしめんと欲す。但し当果は未だ信を取ること難きを恐るるに非ざるにあらず。是の故に自ら證する所を説いて将に物[二]の信を成ぜんとす。是の義を以ての故に二果を宗と為す。但し現に従りて題を立つるが故に涅槃と名づくなり。或いは有るの説くは、円極の一果を是の経宗と為すと。所謂諸仏の大般涅槃[三]なり。

宗に従いて題の名を立つる所以は、瓔珞経[四]は六種の瓔珞[五]を宗と為す。大般若経[六]は三種の般若[七]を宗と為す。当に知るべし、是の涅槃経は一大涅槃を宗と為すと。或いは有るの説くは、諸仏秘蔵[八]の無二の実性[九]を以て経の宗と為す。是くの如きの実性は、相を離れ[一〇]、性を離るるが故に、諸門において障無く、礙無し。

相を離れる故に垢ならず浄ならず、因に非ず果に非ず、一ならず異ならず、有に非ず無に非ず。性を離るるを以ての故に亦た染、亦た浄なり、因たり果たり、亦た一亦た異、有為[一一]たり無為[一二]たり。染と浄とのゆえに或は衆生と名づけ、或は生死[一三]と名づけ、亦た如来と名づけ、亦た法身[一四]と名づく。因果を為すが故に或は仏性[一五]と名づけ、如来蔵[一六]と名づけ、或は菩提[一七]と名づけ、大涅槃と名づく。乃至有無たるが故に名づけて二諦[一八]と為す。有無に非ざるが故に名づけて中道[一九]と為す。一に非ざるに由るが故に能く諸門に当る。異に非ざるに由るが故に、諸門は一味なり。是くの如き無二の秘蔵を以て是の経の宗旨と為す。但し其の題目の中に並べて偏に諸名を存する能わず。且く時事に随いて涅槃の名を立つ。

【現代語訳】

もし仏の意欲に拠るならば、衆生にそれぞれ未来の仏果を獲得させようとされるであろう。ただし、未来の仏果については、（衆生がその獲得を）信ずることが困難であると恐れないわけではないので、それで自ら自分の覚りを説いて、それで衆生に信じさせようとされたのである。このような理由によって、（当果と現果の）二果を経の本旨とする。ただし、現果に従って題を立てているので、涅槃と名づけるのである。あるいは別の説では、円満で究極的な果をこの経の本旨とする、という。いわゆる諸仏の大般涅槃（すぐれて完全な悟りの境地）である。

経の本旨によって、その題名を名づけるのはどのような理由によってか。瓔珞経は六つの種類の瓔珞をなしている。大般若経は、（実相・観照・文字の）三つの種類の般若を本旨となしている。この涅槃経は、一大涅槃を本旨としているということを知るべきである。あるいはまた別の説では、諸仏の秘密の教えの蔵の二つと無いその真理、経の本旨となす、と言う。このような真理は、形と性質とを超えているので、さまざまな面において障害がない。

形をこえているために、けがれてもいず、清らかでもなく、原因でもなく結果でもなく、一つでも異なるものでもなく、有でもなく無でもない。性質をこえているために、染でもあり、また浄でもある。原因でもあり結果でもある、一つのあり方でもあり、異なるあり方でもある。有為でもあり、無為でもある。けがれていること、清らかであることから、あるいは衆生と名付け、あるいは生死と名付け、また、如来と名付け、法身とも名づける。（修行という）原因と結果（としての仏果）という因果関係が成立しているので、あるいは仏性と名付け、如来蔵と名づけ、あるいは菩提と名付け、大涅槃と名づける。また、有無であるために二諦と名づけるのである。有無ではないために、中道と名づける。一つではないために、仏の諸の教えにかなうことができる。異なるものではないという理由によって、諸の教えは平等で無差別なものである。このような二つとない仏の秘密の教えの蔵をこの経の本旨とする。但し、その題目の中に諸の名前をすべて入れることはできない。仮初めに時や事柄に従って涅槃という名前を立てたのである。

一　当果　当来の果。未来の果報。
二　物　生命。生きもの。／衆生のこと。世の人びと。人民。
三　大般涅槃　すぐれて完全なさとりの境地。また、（釈尊の）偉大な死をいう。
四　纓絡経　『菩薩纓絡経』。種々の大乗の法門を説く現在法経（現在現われている法についての経）。
五　瓔珞　仏像の首飾りや、堂、宮殿の飾りに用いるもの。宝を連ねたひも。
六　大般若経　『大般若波羅蜜多経』。
七　般若　さとりを得る真実の智慧。さとりの智慧。真実を見る智慧の眼。存在のすべてを全体的に把捉するにいたる。善悪といった分別から離れた智慧で無分別智と呼ばれる。
八　秘蔵　仏の教えの秘密の蔵。
九　実性　本性。真如の異名。
一〇　離相　仏の所説が一相一味であることを表す三相の一つ。ニルヴァーナに相のないこと。
※三相　①生死の相のない解脱相　②離相　③生死涅槃の相もなく、無相ももたない滅相。
一一　有為　つくられたものの意。因と縁の和合によってつくりだされた（為作、造作、有作の）諸現象をいう。因縁によってつくられた生滅変化するもの。生・住・異・滅の四つの相をとる無常なもの。つくられたもの。直接原因、間接原因によって成立した事物。無為の対。
一二　無為　つくられたものでないもの。種々の原因・条件（因縁）によって生成されたものではない存在。因果関係を離れている存在。成立・破壊を超えた超時間的な存在。生滅変化を超えた常住絶対の真実。現象をはなれた絶対的なもの、無限定なものをさす語。
一三　生死　生と死。迷いの世界、流転の姿を表す代表的なことば。迷いのあり方。迷いの生活。現実社会の苦しみ。生まれかわり死にかわって、絶えることのない迷いの世界。輪廻に同じ。
一四　法身　法仏・法身仏・自性身・法性身・宝仏などともいう。法の集まり。真理を身体としているものの意。真理そのもの。永遠の理法としての仏。本体としての身体。それは純粋で、差別相のないものである。それは空と同じである。
一五　仏性　仏の性質。仏としての本性。覚者（仏）となりうる可能性。大乗仏教ではこれがすべての人間、または存在に具わっているという。
一六　如来蔵　如来の胎の意で、胎とは母胎と胎児のどちらをも意味する。成長して仏となるべき胎児とも、その胎に仏を宿すものともとれるが、いずれにせよ単に心としてではなく、衆生をその存在の可能性全体からとらえた表現である。同時に、構造的にはなお客塵煩悩につきまとわれている状態で、仏と同じではない。凡夫の心のうちに存している如来（仏）となりうる可能性。衆生のうちにある、如来たるべき因。仏となりうる清浄な可能性を内に蔵すること。万有の諸相の成立する根源だと考えられた。

一七　菩提　煩悩を断じて得たニルヴァーナをいう。さとりの境地。さとりの智慧。

一八　二諦　二つの真理。真諦（第一義諦。真実の見方）と俗諦（世俗諦。世俗一般の見方）。真実としての真理と世俗の生活の上での真理。前者は聖人の見るところであり、後者は凡夫の知るところである。

一九　中道　二つのものの対立を離れていること。断・常の二見、あるいは有・無の二辺を離れた不偏にして中正なる道。いずれにもとらわれずに現実を正しく見きわめることをいう。

【テキスト】p.240b ll.10~27

問六師所説何者爲實。答或有説者。諸説悉實。佛意無方無不當故。或有説者。後説爲實。能得如來無方意故。並容前説諸師義故。當知是二説亦不相違也。總説雖然。於中分別。且依二門以示其相。謂涅槃門及佛性門。涅槃之義六門分別。一名義門。二體相門。三通局門。四二滅門。五三事門。六四德門。名義門内翻名釋義。初翻名者諸説不同。或説無翻。或説有翻。有翻之説雖有諸宗。今出一義翻爲滅度。其文證者如法花經長行言。如來於今日中夜入當無餘涅槃。下偈頌曰。佛此夜滅度。如薪盡火滅。又此大經第一卷云。隨其類音普告衆生。今日如來將欲涅槃。六卷泥洹此處文言。悟悗寂滅大牟尼尊告諸衆生。今當滅度。以是等文當知滅度正翻涅槃也。無翻之説亦有諸宗。且出一義。彼師説言。外國語容含多名訓。此土語偏不能相當。是故不可一名而翻。

【書き下し】

問う、六師の所説、何者をか実と為す。答う、或いは有るの説くは、諸説悉く実なり。仏意は無方一にして当たらざる無きが故なりと。或いは有るの説くは、後説を実と為す。能く如来の無方の意を得るが故なりと。並びに前説の諸師の義を容れる

が故なり。まさに知るべし、この二説もまた相違せざることを。総説二は然りといえども、中において分別せば、しばらく二門によりて以ってその相を示す。涅槃門及び仏性門をいう。涅槃の義は六門を分別す。一は名義門。二は体相三門。三は通局四門。四に二滅門。五に三事五門。六に四徳六門。名義門の内に名を翻じ義を釈す。初め名を翻ずるは、諸説不同なり。或いは、翻ずるなしと説く。或いは、翻ずる有りと説く。翻ずる有りの説は、諸宗有りといえども、今一義を出して翻じて滅度と為す。その文證は、法花経の長行に言うが如し。「如来今日の中夜七において、入りてまさに無余八涅槃に入るべし九」と。下の偈頌に曰く、「仏この夜滅度すること、薪尽きて火滅するが如し一〇」と。又此の大経第一巻に云く、「其の類の音に随いて衆生に普く告げて、今日如来まさに涅槃せんと欲す一一」と。六巻泥洹の此の処の文に言はく、「悟悗一二寂滅なる大牟尼一三尊は諸の衆生に今当に滅度すべしと告げたもう一四」と。これらの文を以って、当に知るべし、滅度は涅槃と正しく翻ずるなりと。翻ずる無しの説もまた諸宗あり。しばらく一義を出す。彼の師の問いて言わく、外国語は多くの名訓を容含す。此の土の語は、ひとえにして相当ることあたわず。この故に、一名にして翻ずるべからずと。

【現代語訳】

質問する。六師の説のいずれが真実であるか。答えて言う。ある人の説くには、「諸説は全て真実である。仏の心に決まった方向性はなく、それを定めることなど出来ないからだ」と。また別の説では、「後の説を真実とする。よく如来の心に決まった方向性がないことを知っているからだ。これは前の諸師の説の内容も受け入れているため、この二説の間には違いがないことを知るべきだ」という。総説はこの通りであるけれども、その内容を細かく分別する場合は、二つの方向性によってその様相を示すことにしよう。その方向性とは涅槃門と仏性門とである。涅槃の意味は六つに分けられる。一つは名称と意義の方向性。二つは本体とその相との方向性。三つは全体に通じること、及び一部分に限ること。四つは二滅。五つは戒・定・慧の三学。六つは涅槃の四徳。まずは名称と意義の方向性について翻訳して意味を説明する。初めに、名称の翻訳については、諸説は一致しない。ある説は翻訳できないと言い、ある説では翻訳できるとし、翻訳できるとする説の中でも、さらに意見が分

かれたが、今は一つの意味を出して滅度とされている。その証拠は、法華経の長行に言う「如来は今日の中夜に無余涅槃に入る」という文にある。その下の偈頌には「仏はこの夜に、薪が燃え尽きて火に滅するかのように滅度する」とある。また大涅槃経の第一巻には「その類に従って衆生に普く告げる。如来は今日まさに涅槃に入らんとする」とある。『六巻泥洹』のこの場所の文に「素晴らしく心静かな状態にある偉大なる聖者が諸々の衆生に告げる。今まさに滅度するであろう」とある。これらの文によって、滅度を涅槃と翻訳すると知るべきだ。翻訳できないという説にも様々な意見があるが、いま一つの意見を出しておこう。彼の師が言うには、外国語は多くの名称と意義を内包している。此の土地の言葉は偏っており、一つの言葉で言い表すことはできない。だから、一つの名称に翻訳できないと。

一 無方　方向性が無限定なこと
二 総説　まとめて説くこと。一般性。
三 体相　本体すなわち特質と形相、すがた。
四 通局　通とは一般に行き渡ること。局とは一部分に限ること。
五 三事　戒・定・慧の三学。
六 四徳　四つのすぐれた性質。涅槃の常・楽・我・浄の徳性。
七 中夜　夜の中ごろの部分。夜なか。
八 無余　死後に生まれ変わらないこと。
九 『妙法蓮華経』序品に
「如來於今日中夜當入無餘涅槃。」とある（『大正蔵』巻九、p.4b）。
一〇 『妙法蓮華経』序品の偈に、
「佛此夜滅度　如薪盡火滅」とある（『大正蔵』巻九、p.5a）。
一一 『涅槃経』三六巻本（南本）巻第一に、
「隨其類音普告衆生。今日如來應供正遍知。憐愍衆生覆護衆生。等視衆生如羅睺羅。爲作歸依爲世間舍。大覺世尊將欲涅槃。」とある（『大正蔵』巻十二、p.605a）。

一二　悟倓　日光輪王寺写本に「悟惔」とあり（『校訂国訳涅槃経宗要』二八六頁五行目）、『大正蔵』テキストもこれに拠っているが、『六巻泥洹』の経文には「恬淡」とある。写本の写誤か。注一四も参照。

一三　大牟尼　聖者の意。仏の異名。

一四　法顕訳『六巻泥洹』（『佛説大般泥洹經』）に、

「恬淡寂滅大牟尼尊。告諸衆生今當滅度。」とある（『大正蔵』巻十二、p.853a）。

【テキスト】p.240b l.27~p.240c l.8

其文證者如德王品第七功德文言。涅者不槃者識。不識之義名爲涅槃。槃言覆。不覆之義乃名涅槃。槃言去來。不去不來乃名涅槃。槃者言取。不取之義乃名涅槃。槃者不定。無不定義乃名涅槃。槃言新故。無新故義乃名涅槃。槃言障礙。無障礙義乃名涅槃。又下文言。善男子槃者言有。無有之義乃名涅槃。槃者名爲和合。無和合義乃名涅槃。槃者言苦。無苦之義乃名涅槃。此處略出是十種訓。上下諸文乃衆多。故知不可一語而翻。

【書き下し】

其の文証一は徳王品第七功徳二の文に言うが如し。「涅とは不、槃とは識なり。不識の義を名づけて涅槃と為す。槃は覆と言う。不覆の義を乃ち涅槃と名づく。槃は去来と言う。不去不来乃ち涅槃と名づく。槃とは取と言う。不取の義を乃ち涅槃と名づく。槃とは不定なり。不定無きの義を乃ち涅槃と名づく。槃は新故と言う。新故無きの義を乃ち涅槃と名づく。槃は障礙と言う。障礙無きの義を乃ち涅槃と名づく三」と。又下の文に言く。「善男子、槃とは有と言う。有無きの義を乃ち涅槃と名づく。槃とは名づけて和合と為す。和合無きの義を乃ち涅槃と名づく。槃とは苦と言う。苦無きの義を乃ち涅槃と名づく四」と。此

の処に是の十種の訓を略出す。上下に諸文乃ち衆多なり。故に一語にして翻ずべからざるを知るべし。

【現代語訳】

その証拠となる経文は、光明遍照高貴徳王菩薩品の第七功徳の文言にある通りである。「涅槃の〔涅〕とは〔不〕（否定辞）という意味で、〔槃〕とは識ることという意味である。識ることがないという意味が、涅槃である。〔槃〕は覆うことを言い、覆うことがないという意味を涅槃と名付ける。槃は去来という意味で、〔涅〕は〔不〕の意味なので、去ることも来ることもないという意味を涅槃と名付ける。〔槃〕は執着という意味で、執着しないという意味を涅槃と名付ける。〔槃〕は、不定という意味である。不確定なことがないという意味を涅槃と名付ける。〔槃〕は新しいものと古いものという意味を言い、新旧がないという意味を涅槃と名付ける。〔槃〕は障害という意味で、障害がないという意味を涅槃と名付ける」と。また下の（経）文に言うには、「菩薩よ、〔槃〕は〔有〕という意味である。〔有〕がないという意味を涅槃と名付ける。〔槃〕は和合という意味である。和合がないという意味を涅槃と名付ける。〔槃〕は苦しみという意味である。苦しみがないという意味を涅槃と名付ける」と。ここには十種の読みを略して記してある。（涅槃の意味に関する）文は、高貴徳王菩薩品の前後で多い。よって、一つの言葉で訳すことができないことが知られる。

一　文証　証拠となる経文

二　光明遍照高貴徳王菩薩　大般涅槃経二十一巻から第二十六巻までの主人公。光明遍照の表現は無量寿仏、つまり阿弥陀仏の特徴を示している。無量寿仏は八万四千の特徴があり、その一つ一つの特徴から光明を放ち、十方の数えきれない生類を照らし、救済していると言う意味がある。この菩薩はこのブッダの一つの姿と考えられる。ここの記述は、光明遍照高貴徳王菩薩が涅槃の教えの実践と習得についてのブッダの説法を踏まえて、その実践と習得による功徳はなにかと質問するところによっている。この質問に対してブッダは十種の功徳があると説く。第七功徳とはその七番目の功徳である。各功徳の詳細な説明は光明遍照徳王菩薩品の内容の全てとなる。

第七の功徳として、涅槃を得る近道としての四事が説かれる。

一、善良な友と親しくなること。
二、仏法を一心に聞くこと。
三、教えられたことを記憶し、よく思量すること。
四、教えたとおりに実行すること。

田上太秀『ブッダ臨終の説法三』大蔵出版、一九九七年、十五―十八、四十一頁参照。

三 『大般涅槃経』（南本）（『大正蔵』巻十二、p.758c ll.18~23）

「涅者言不。槃者言滅。不滅之義名爲涅槃。槃又言覆。不覆之義乃名涅樂。槃言去來。不去不來乃名涅槃。槃者言取。不取之義乃名涅槃。槃言不定。定無不定乃名涅槃。槃言新故。無新故義乃名涅槃。槃言障礙。無障礙義乃名涅槃。」

『大般涅槃経』（北本）（『大正蔵』巻十二、p.514c ll.15~20）

「涅者言不。槃者言織。不織之義名爲涅槃。槃又言覆。不覆之義乃名涅槃。槃言去來。不去不來乃名涅槃。槃者言取。不取之義乃名涅槃。槃言不定。定無不定乃名涅槃。槃言新故。無新故義乃名涅槃。槃言障礙。無障礙義乃名涅槃。」

南本では〔槃者言滅〕の箇所が〔滅〕となっているが、北本では〔織〕となっている。宋本・元本・明本では、〔織〕となっている。また日光輪王寺写本も「織」だが（『校訂国訳涅槃経宗要』二八七頁二行目）、大正蔵の本書テキストでは〔識〕となっている。

四 『大般涅槃経』（『大正蔵』巻十二、p.758c ll.25~27）

「善男子。槃者言有。無有之義乃名涅槃。槃名和合。無和合義乃名涅槃。槃者言苦。無苦之義乃名涅槃。」

【テキスト】p.240c ll.8~15

問若立後師義是難云何
通。謂有難曰。經説有翻耶得無翻。如言隨其
類音普告衆生今日如來將欲涅槃。豈隨蜂
蟻六道之音得翻涅槃之名。而獨不得此國
語翻。又當此處經文既翻云之滅度。豈可得
云不能翻耶。彼師通曰。涅槃之名多訓之内
且取一義翻爲滅度。即依此訓普告衆生。非
謂其名只翻滅度。以是義故彼難善通。

【書き下し】

問う、若し後の師の義を立つるならば是の難云何んが通ずるや。謂く、有るが難じて曰く、「経説は有翻なるや、無翻を得るや。其の類の音[一]に随って普く衆生に『今日如来将に涅槃せんと欲すと告げたまう[二]』と言うが如し。あに蜂蟻六道[三]の音に随いて涅槃の名を翻ずるを得て、而して独り此の国の語にのみ翻ずるを得ざらんや。また此の処に当たりて経文既に翻じて之を滅度と云う。あに翻ずる能わざると云うことを得べけんや」と。彼の師通じて曰く、「涅槃の名の多くの訓の内に、且らく一義を取りて翻じて滅度と為す。即ち此の訓に依りて普く衆生に告げたまう。其の名を只滅度と翻ずるのみと謂うに非ず」と。是の義を以て故に彼の難は善く通ず。

【現代語訳】

問う、「もし後の師の（翻訳できないという）説を採用するならば、この難点をどのように解決させるか」と。ある人が以下のように非難して言うには、「経説は翻訳できるのか、あるいは翻訳できないのか。その類の音声によって広く衆生に告げられた、『如来は涅槃に入るであろう』と言うがごとしと。どうして蜂や蟻のような六道の衆生の音声に従って涅槃の名を翻訳できて、ただこの国の言葉にだけ翻訳することができないということがあろうか。また、ここでは経文はすでにこれを翻訳して滅度と言っている。どうして翻訳できないと言うことができようか」と。かの師が会通して言うには、「涅槃の名は多くの意味の中から一つの意義を取って、かりそめにそれを翻訳して滅度と言うのである。つまり、この意味（滅度）によって広く衆生に告げられた。その名を翻訳して単に滅度というのではないのだ」と。以上のことからして、かの非難はよく会通できるのである。

一　音　音声。ここでは説法を聴く衆生それぞれの音声。

二　『大般涅槃経』（南本）（『大正蔵』巻十二、p.605a ll.11~14）
「隨其類音普告衆生。今日如來應供正遍知。憐愍衆生覆護衆生。等視衆生如羅睺羅。爲作歸依爲世間舍。大覺世尊將欲涅槃。」

三　六道　地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天の六種の境界。

【テキスト】p.240c ll.15~25

問若
立初師義是文云何通。如徳王品菩薩難言。
若使滅度非涅槃者。何故如來自期三月當
般涅槃。師子孔品云。諸結火滅故名滅度。離
覺觀故故名涅槃。以是文證明知滅度非正
翻於涅槃名也。彼師通曰。此等經文是翻譯
家故漢互擧綺飾其文。若使令存外國語者。
既言若使涅槃非涅槃者。又諸結火滅故名
涅槃離覺觀故故名涅槃。如其令存此土語
者。既云若使滅度非滅度者。下文例爾。由是
義故不相違也。

【書き下し】

問う。若し初師の義を立つれば、是の文、云何んが通ずるや。徳王品に菩薩難じて言うが如し。「若し滅度をして涅槃に非ざらしめば、何が故ぞ如来自ら三月にして当に般涅槃すべしと期せんや[一]」と。獅子孔品に云く。「諸結[二]の火滅するが故に滅度と名づく。覚観[三]を離るるが故なり。故に涅槃と名づく[四]」と。是の文証を以て明らかに知んぬ。滅度は正しく涅槃の名を翻ずるに非ざるなりと。彼の師通じて曰く。此等の経文は是れ、翻訳家もとより漢互いに挙げて其の文を綺飾す。若し外国語をして存ぜしめば、既に〈若使涅槃非涅槃者〉と言えり。又た諸結の火滅するが故に涅槃と名づく。覚観を離るるが故なり。

故に涅槃と名づく。如し其れ此の土の語をして存ぜしめば、既に若し滅度をして滅度に非らざらしめば、既に〈若使滅度非滅度者〉と云えり。下の文も例して爾り。是の義に由るが故に相違せざるなり。

【現代語訳】

問う。もし初師の説をとれば、これらの説はどのように会通することができるだろうか。高貴徳王菩薩品に（高貴徳王）菩薩が（仏を）論難して言う通りである。「もし滅度が涅槃でなかったら、どうして三ヶ月後に完全に涅槃に入ると約束されたのでしょうか」と。また、獅子吼菩薩品に次のように説かれる。「多くの煩悩の火が消滅するから滅度という。精・粗の心作用を離れているから涅槃という」と。これらの経文によって明らかである。滅度は涅槃という語をそのまま翻訳したものではない、と。彼の師が会通して言うには、「これらの経文はもとより、訳経者が漢語をあれこれと用いて訳文を飾り立てたものである。外国語を残せば、〈若使涅槃非涅槃者〉と言うことになる。また、煩悩の火が消滅するから涅槃といい、精・粗の心作用を離れているから涅槃という。漢語を残せば、〈若使滅度非滅度〉と言うことになる。下の文は先と同様である」と。以上の意味合いによって、両者の説が矛盾せずに同時に成立しうるのである。

一　『大般涅槃経』（南本）「高貴徳王菩薩品」引用（『大正蔵』巻十二、p757c ll.6~12）

「世尊。若使滅度非涅槃者。何故如來自期三月當般涅槃。世尊。若斷煩惱是涅槃者。如來往昔初在道場菩提樹下。斷煩惱時便是涅槃。何故復言却後三月當般涅槃。世尊。若使爾時是涅槃者。云何方爲拘尸那城諸力士等。説言後夜當般涅槃。如來誠實云何發是虚妄之言」

二　結　煩悩。衆生を生死に結び付け、繋ぎとめている諸要素。

三　覚観　覚（大まかな思考、心の分別作用）、観（微細な思考、細かな分別心）。

四　『大般涅槃経』（南本）「獅子吼菩薩品」引用（『大正蔵』巻十二、p794b l.27~c l.2）

「諸結火滅。故名滅度。離覺觀故。故名涅槃。遠憒閙故。名曰寂靜。永斷必死。故名無病。一切無故。名無所有。善男子。若菩薩摩訶薩作是觀時。即得明了見於佛性」

【テキスト】p.240c l.25~p.241a l.4

問二師所説何是何非。答或有説者。二説俱是。悉依經文而成立故。是義云何。涅槃之名即含二義。所謂密語及顯了語。依顯了語正翻滅度。如初師説。若依密語即含多訓。如後師訓。由是道理二説悉得。若依是意通彼難者。就顯了義有正翻。故隨其類音普告衆生。就其密語含多義訓。是故後文亦得善通。説言。若使滅度者擧顯了語死滅度也。非涅槃者取密語内不識義也。

【書き下し】

問う、二師の所説は何れが是、何れが非なるやと。或いは有るの説くは、「答う、二説倶に是なり。悉く経文によりて成立する故なり」と。是の義は云何。涅槃の名は即ち二義を含む。所謂密語[一]及び顯了[二]語なり。顯了語に依りては、正しく〈滅度〉と翻ず。初師の説のごとし。若し密語に依らば、即ち多訓を含む。後師の訓のごとし。この道理に依りて、二説悉く得。若しこの意に依らば、彼の難は通ず。顯了の義に就かば正しく翻ずる有り。故にその類音に随いて、普く衆生に告ぐ。其の密語に就かば、多義の訓を含む。この故に後文もまた善く通ずるを得。説いて言はく、〈若使滅度〉は顯了語を挙ぐれば、死は〈滅度〉なり[三]。「非涅槃者」は、密語の内の〈不識〉の義を取るなり[四]。

【現代語訳】

問う、「二人の説くところはどちらが正しいのかどちらが間違いなのか」と。ある人が言うには、「二師の説くところは両方とも正しい。すべて経文に根拠があって、成立しているからである」と。この意味はどういうことだろうか。〈涅槃〉という言葉はすなわち二つの意味を含んでいる。（いわゆる）密語と顯了語とである。顯了語に基づけば、確かに〈滅度〉と翻訳されている。初師の説くところのようである。もし密語に基づけば、（密語では）多くの意味を含んでいる。後師の説くところ

のようである。この理由によって、二説は両方とも成り立つ。若しこの考えによるならば、その難点は解決する。顕了語の意味の立場では確かに翻訳されるのである。よって、（経の説くように）「衆生のそれぞれの言葉にしたがって、広く衆生に（仏が）告げられる」のである。密語に基づいたならば多くの意味を含んでいる。この理由によって、後師の言葉もまた善く会通することができる。説いて言うには、〈若使滅度〉とは顕了語を挙げるので、〈死〉は〈滅度〉である。〈非涅槃者〉とは密語の内の「〈不識〉の意味」を取るのである。

一 密語　仏が真実を裏に隠して説いたことばや教え。
二 顕了　明らかなこと。言葉が明瞭なこと。
三 『大般涅槃経』（南本）（『大正蔵』巻十二、p.757c ll.6~12）
「月吾當涅槃。世尊。若使滅度非涅槃者。何故如來自期三月當般涅槃。世尊。若斷煩惱是涅槃者。如來往昔初在道場菩提樹下。斷煩惱時便是涅槃。何故復言却後三月當般涅槃。世尊。若使爾時是涅槃者。云何方爲拘尸那城諸力士等。說言後夜當般涅槃。如來誠實云何發是虛妄之言」
四 〈不識〉の語のうち、〔識〕の字は、大正蔵テキストの『涅槃経』北本では〔織〕（「涅者言不。槃者言織。不織之義名爲涅槃」p.514c l.15-l.16）とし、南本では〔滅〕（『大正蔵』巻十二p.758c ll.18~19）となっている。ただし、南本テキストの対校記では、三本・聖護蔵本ともに〔織〕とある。『涅槃宗要』の『大正蔵経』テキストではここのように「識」とあるが、その底本である日光輪王寺写本では北本涅槃経と同じく「織」とある（『校訂国訳涅槃経宗要』二九一頁三行目）。『校訂国訳涅槃経宗要』はおそらく南本涅槃経テキストに拠ってか、「滅」としている（同書四七頁、注一〇三）。

【テキスト】p.241a ll.4~11

難意正言。若使死滅之滅度義非不滅之涅槃義者。何故以是不識之名自期三月當般涅槃。
以先樹下成道之時已得不識之涅槃故。要有煩惱乃識生死。故師子吼言。諸結火滅名滅度者亦是顯了語之滅度。離覺覺故名涅槃者取密語内無苦之義。入無餘時苦報滅已方

離覺覺分別心故。由是道理諸善説通也。

【書き下し】

難の意正しく言わく、〈若使死滅〉の滅度の義は不滅[一]の涅槃の義に非ざれば、何が故に是の不識[二]の名を以って「自ら三月に当に般涅槃すべしと期す」とするや。先の樹下の成道の時を以ってすでに不識の涅槃を得たる故なり。要ず煩悩有らばすなわち生死を識る。故に師子吼に言う。〈諸結火滅名滅度〉とは、また是れ顕了語の滅度なり。〈離覚覚故名涅槃[三]〉とは、密語の内を取りて苦無きの義なり。無余[四]に入る時、苦報滅し已り、まさに覚覚（観[五]）の分別心を離れるが故なり。この道理に由りて、諸の善説通ずるなり。

【現代語訳】

論難の意味は正しく、次のようである。すなわち、〈若使滅度〉の「滅度」の意味は不滅という意味ではないのであれば、どうして「不織」の名称によって「自ら三カ月後に般涅槃する」と言うのであるかと。その前に菩提樹の下で悟りを開いた時にすでに「不識」という涅槃を得ていたではないか。必ず煩悩があれば（すなわち）生死を識るのである。それ故、師子吼菩薩品に言う〈諸結火滅名滅度〉とは、また、これは顕了語としての滅度（の意味）である。〈離覚観故名涅槃〉とは、密語の中の苦しみが無いという意味を取るのである。無余涅槃に入る時に苦という報いを滅し終わり、まさに精・粗の心作用という心の働きを離れているからである。

以上の道理によって、多くの善説が通用するのである。

一　不滅　この語の「滅」の字は『大正蔵経』テキストの底本である日光輪王寺写本では「織」の字となっている（『校訂国訳涅槃経宗要』二九一頁三行目）。

二　不識　この語の「識」の字は日光輪王寺写本では「織」の字となっており（前注書同頁三～四行）、『大正蔵経』テキストの翻刻が一定していない。この文脈では「不滅」の方が意味が取りやすい。

三　〈離覚覚故名涅槃〉　「離覚覚」は先に挙げた引用文にあるように『涅槃経』自体は「離覚観」である。しかし、『涅槃宗要』の『大正蔵経』テキスト、その底本である日光輪王寺写本では「離覚覚」となっており、誤りと思われる。それが著者元暁の誤りか写本の誤りかは判然としない。なお、『校訂国訳涅槃経宗要』では「覚観」と訂正している（四八頁注一〇七）。

四　無余　余すところ無く涅槃の境地に至ること。

五　離覚覚分別心　この「離覚覚」も前注三と同様の状況で、日光輪王寺写本も「離覚覚」になっているが「離覚観」である可能性が高い。『校訂国訳涅槃経宗要』も「離覚観」と訂正している（同前書同頁注一〇八）。いま、書き下しにはカッコで示し、現代語訳は「覚観」の意で訳した。

【テキスト】p.241a ll.11~19

次釋義者。且依顯了之語以釋有翻之義。此土釋之言大滅度。所言大者。古人釋云。莫先爲義。謂釋勝之時莫是爲先。非約時前後言無先也。依下經文大有六義。一者廣之莫先故名爲大。如經言。大者其性廣博猶如虛空無所不至。涅槃如是故名爲大。二者長之莫先故名爲大。如經言。所言大者名之爲長。譬如有人壽命無量名大歲夫。

【書き下し】

次に義を釈せば、且らく顕了一の語により以って有翻の義を釈す。此の土にこれを釈して大滅度と言う。言う所の「大」とは古人釈して云く、先莫きを義となす。「勝」を釈するのとき、是を先と為すなきを謂う。時の前後に約して先なしと言うに非ざるなりと。下の経の文に依らば「大」に六義有り。一は広の先莫きが故に名づけて大と為す。経の言う如く「大」とは其の性広博二にして三猶お虚空四の如く至らざる所無しと。涅槃は是くの如きなるが故に名づけて大と為す。二には長の先莫きが

故に名づけて大と為す。経に言う如く、「言う所の『大』とは之を名づけて長と為す。譬えば人有りて寿命の無量なるを大歳夫と名づくるが如し[五]」と。

【現代語訳】

次に意味を解釈するとは、しばらく顕了の語に依って翻訳できるという意味を説明する。この中国では、訳して大滅度という。「大」とは古人が解釈して先（例）がないということがその意味である。すぐれていることを解釈して先（例）がないというのである。時間の前後について先がないと言うのではない。次の経文に依るならば「大」には六つの意味がある。一つは広大さという点について、それを越えるものがないので大と名付ける。経文に、「大」とはその本性が広大であって、虚空の如くでありいきわたらないところがない、というが如くである。涅槃とはこのようなものなので、名付けて大とする。二には長さの点でその先がないということで「大」と名付ける。経文にあるように「大とは長と名付ける。例えば人があって、寿命が無限であることを大歳夫と名付けるが如くである」と。

一　顕了　明らかなこと。先に出てきた「密語」の対。

二　広博　ひろい。同じ意味の語を二字重ねた熟語。

三　大者其性廣博　以下の「猶如虚空無所不至。涅槃如是故名爲大。」の文言が『大般涅槃経』北本・南本共にない。

『大般涅槃経』南本（『大正蔵』巻十二、p.391b l.29~p.391c l.4）

「佛告迦葉。所言大者其性廣博。猶如有人壽命無量名大丈夫。是人若能安住正法名人中勝。如我所説八大人覺。爲一人有爲多人有。若一人具八則爲最勝。所言涅槃者無諸瘡疣。」

『大般涅槃経』北本（『大正蔵』巻十二、p.631c ll.13~17）

「佛告迦葉。所言大者其性廣博猶如有人壽命無量名大丈夫。是人若能安住正法名人中勝。如我所説八大人覺。爲一人有爲多人有。若一人具八則爲最勝。所言涅槃者無諸瘡疣。」

四　虚空　虚・空とも無の別称。虚にして形質がなく、空であり、その存在が他のものに障害とならないが故に虚空と名付ける。

五　前註三で挙げた『大般涅槃経』の引文中に「猶如有人壽命無量名大丈夫」とある。

【テキスト】p.241a ll.19~29

三者深之莫先故
名爲大。如經言。大者名爲不可思議。一切世
間聲聞緣覺不能測量涅槃之義故名爲大。
四者高之莫先故爲大如經言。譬如大山一
切世人不能得上故名爲大。涅槃如是凡夫
二乘及諸菩薩不能窮到故名爲大。五者多
之莫先故名爲大。如經言。譬如大藏多諸珍
寶。涅槃如是多有種種妙法珍寶故名大。六
者勝之莫先故名爲大。如經言。如世間中勝
上主人名爲大人。涅槃如是諸法中勝故名
爲大。大義如是。

【書き下し】

三には深きことの先莫きが故に名づけて大と為す。経の言う如く一、①「大とは名づけて不可思議と為す。一切世間と声聞縁覚、涅槃の義を測量すること能わざるが故に名づけて大と為す」と。四には高きことの先莫きが故に名づけて大と為す。経の言う如く、②「譬えば大山の一切世人の上ることを得る能わざるが故に名づけて大と為すが如し」と。涅槃も是くの如く凡夫二乗及び諸の菩薩の窮到すること能わざるが故に名づけて大と為す。五には多きことの先莫きが故に名づけて大と為す。経の言う如く、③「譬えば大蔵に諸の珍宝多きが如し。涅槃も是くの如く多く種種の妙法珍宝有るが故に名づけて大と為す」と。六には勝ること先莫きが故に名づけて大と為す。経の言う如く、④「世間の中に勝上の主人を名づけて大人と為すが如し。涅槃も是くの如く諸法の中に勝れたるが故に名づけて大と為す」と。大の義是くの如し。

【現代語訳】

三には、深いことがこの上ないために名づけて大とするのである。経文に言うとおり、「大とは不可思議と名づける。およそ世の中の全ての人々と声聞、縁覚の輩には涅槃の意味を推し量ることができないために名づけて大とするのである」と。四には、高いことがこの上ないために名づけて大とするのである。経文に言うとおり、「例えば高い山を、誰もが上ることができないために大と名づけるのと同じである」と。涅槃もこのように凡夫や声聞、縁覚の輩やさらには菩薩たちも極めきることができないために名づけて大とするのである。五には、多いことがこの上ないために大と名づけるのである。経文に言うとおり、「例えば大蔵に諸々の珍宝が多いことと同じである。涅槃にもこのように種々の妙法や珍宝が多く蔵されているために名づけて大とするのである」と。六には、優れていることがこの上ないために名づけて大とするのである。経文に言うとおり、世の中で優れている人物を名づけて大人とするのと同じである。涅槃もこのように諸法の中で優れているために名づけて大とする」と。大の意味はこの通りである。

一　書き下し文中①～④の引用部分はそれぞれ『大乗義章』にほぼそのままの形で載る。元暁はこれを引用しているか。

『大乗義章』慧遠述（『大正蔵』巻四十四、p.813c l.18~p.814a l.3）

「爲摩訶般涅槃那。摩訶名大。大義有六。一者常義。故涅槃云。所言大者名之爲常。譬如有人壽命無量名大丈夫。二者廣義。故涅槃云。所言大者其性廣博。猶如虛空無所不至。涅槃如是。故名爲廣。三者多義。能別非一。故涅槃云。③譬如大藏多諸珍異。涅槃如是。多有種種妙法珍寶。故名爲大。四者深義。淵奧難測。故涅槃云。①大者名爲不可思議。一切世間聲聞緣覺不能測量涅槃之義。故名爲大。五者高義。位分高出餘人不至。故涅槃云。②譬如大山一切世人不能得上。故名爲大。涅槃如是。凡夫二乘及諸菩薩不能窮到。故名爲大。六者勝義。④如世間中勝上之人名爲大人。涅槃如是。諸法中勝。故名爲大。大義如是。」

【テキスト】p.241a l.29~p.241b l.10

所言滅者略有四義。事滅理
滅德滅擇滅。言事滅者。還無爲義。義當應化
身。正智亦亡故名爲滅。如經言。佛此夜滅度。
如薪盡火滅。如是事滅當體立名。言理滅者。
寂漠爲義。謂從本來無動無起故名爲滅。如
經言。一切諸法不生不滅本來寂靜自性涅
槃。如是理滅寄全音。言德滅者。永離爲義。謂
諸功德離相離性不守自性互相一味故名爲
滅。如下文言。受安樂者即解脫。眞解脫者
即是如來。如來即涅槃乃至廣説。如是德滅
從義受名。

【書き下し】

言う所の滅には略して四義[一]有り。事滅、理滅、德滅、択滅なり。事滅と言うは、無に還るを義と為す。義は当に応化身なるべし。正しく智もまた亡ずるが故に名づけて滅と為す。経の言う如く、「仏この夜に滅度す。薪つきて火滅するが如し[二]」と。是くの如く、事滅の当体に名を立つ。理滅と言うは、寂漠を義と為す。謂く、本よりこのかた動無く起無きが故に名づけて滅と為す。経の言う如く、「一切諸法は不生不滅なり。本来寂静にして自性涅槃なり[三]」と。是くの如く理滅は全音に寄る。徳滅と言うは、永離を義と為す。謂く、諸の功徳は離相・離性にして自性を守らず、互いの相、一味[四]なるが故に名づけて滅と為す。下の文に言うが如く、「安楽を受くるは即ち解脱なり。真解脱は即ち是れ如来なり。如来は即ち涅槃なり乃至広説[五]」[六]と。是くの如く徳滅は義に従って名を受く。

【現代語訳】

経文に言う所の「滅」には簡略に言えば四つの意味がある。それは「事滅」、「理滅」、「徳滅」、「択滅」である。「事滅」と言うのは無に還るということを意味する。この意味は応化身ということであろう。まさしく、智も消滅するので名づけて滅と

するのである。経文に言うとおり、「仏はこの夜に入滅する。薪が燃えつきて火が消えるように」と。このように「事滅」の具体的内容そのものによって名を立てるのである。「理滅」と言うのは、寂漠という意味である。本来、動くことがなく、生起することもないので名づけて滅とするのである。経文に言うとおり、「一切の存在は生じもせず、滅しもしない。本来寂静でその自らの性質として涅槃である」と。このように「理滅」とは完全な字（としての言葉の意味）によることである。「徳滅」と言うのは、永離という意味である。様々な徳性というのは、（一切の存在が）様相を離れ、本性を離れ、それ自体の本性を有せず、相互に平等一味であるから、名づけて滅とするのである。下記の経文に言うとおり、「安楽を享受することはすなわち解脱である。真の解脱とはすなわち如来である。如来とはすなわち涅槃、ないしは云々」と。このように「徳滅」とは意味に従って名づけたものである。

一　四義　滅の四義について浄影寺慧遠『大般涅槃経義記』に、

「滅有四義。一是事滅。滅生死因。盡生死果。二是徳滅。捨修安寂。故名爲滅。又佛眞徳離相離性。亦名爲滅。言離相者。如淨醍醐。體雖是有。而無青黄赤白等相。亦如一切衆生心識。體雖是有。而無大小長短等相。涅槃亦爾。體雖是有。而無一相。無何等相。如下文説。謂無色聲香味觸相。無生住滅男女等相。乃至無有自相可取。言離性者。大涅槃中。諸徳同體。共相集成。無有一徳別守自性。如就諸徳宣説常義。離諸徳外。無別有一常性可得。諸義齊然。故下文言。又非別異。故成涅槃。三是應滅。隨化世間。示滅有因。現亡身智。四是理滅。如經中説。一苦滅諦。一切衆生畢竟寂滅。即涅槃相。如是等也。理滅有二。一是相空。妄想諸法。空無自實。二是眞空。如來藏中恒沙佛法。離相離性。言離相者。如馬鳴説。謂非有相。非無相。非非有相。非非無相。非有無俱相。非自相。非他相。非非自相非非他相。非自他俱相。如是一切妄心分別。悉不相應。唯證境界。言離性者。是諸佛法同一體性。互相集成。不離不脱。不斷不異。以同體故。無有一法別守自性。滅義雖衆。要唯此四。」（『大正蔵』巻三七、p.614a l.19~b1.12）とあり、以下のパラグラフも含めて浄影寺慧遠を踏まえていることが分かる。

二　『妙法蓮華経』鳩摩羅什訳（『大正蔵』巻九、p.5a ll.20~22）に、

「號曰爲淨身　亦度無量衆佛此夜滅度　如薪盡火滅分布諸舍利　而起無量塔」とある。

前注同様に慧遠の『大乗義章』には、

「又法華説。日月燈佛説法華竟。於後夜分入於涅槃。下文重頌佛此夜滅度如薪盡火滅。長行之中云言涅槃。偈言滅度。明知。涅槃是滅非總。問

曰。若使涅槃是滅何故經言諸結火滅名爲滅度。離覺觀故稱曰涅槃。」（『大正蔵』巻四四、p.814b ll.14~18）とあり、慧遠の影響が看取される。

また、これとほぼ同文が同じ慧遠の『大般涅槃経義記』中に見える（『大正蔵』巻三七、p.614a ll.9~14）。

三 『佛説開覺自性般若波羅蜜多經』惟淨譯（『大正蔵』巻八、p.855b ll.18~20）

「復次須菩提。若有人言。如佛所説。色無自性不生不滅。本來寂靜自性涅槃。作是説者。彼於一切法即無和合亦無樂欲。」

四 一味　事（諸事象）または理（本質）の平等であることを、海水の全てが同一の塩味であるのに喩える。また、無差別のこと。

五 広説　云々。引用文の終わりの方を略して言う。

六 『大般涅槃経』（南本）（『大正蔵』巻十二、p.636a ll.13~15）

「受安樂者即眞解脱。眞解脱者即是如來。如來者即是涅槃。涅槃者即是無盡。無盡者即是佛性。佛性者即是決定。決定者即是阿耨多羅三藐三菩提。」

【テキスト】p.241b ll.10~18

言擇滅者。斷除爲義。佛智能斷一切煩惱故名爲滅。若依是義。涅槃非滅。而受名者略有三義。一者從處得名。謂佛窮到無住之原。是處能斷一切煩惱。斷煩惱處故名爲滅。如經言。涅槃亦爾。無有住處。直是諸佛斷煩惱處故名涅槃。二者從因受名。謂智滅或能顯於理。理顯是果。智滅爲因。從因立名名理爲滅。如此經言。煩惱爲薪智惠爲火。以是因緣成涅槃食。令我諸弟子皆悉甘嗜。

【書き下し】

択滅と言うは、断除一を義と為す。仏の智、能く一切の煩悩を断ずるが故に、名づけて滅と為す。若し是の義に依らば、涅槃は滅にあらず。而して、名を受くるは略して三義有り。一には処に従いて名を得。謂く、仏、無住二の原に窮到す。是の処、

能く一切の煩悩を断ず。煩悩を断ずる処の故に、名づけて滅と為す。経の言う如く、「涅槃も亦爾り。住処有ること無し。直に、是の諸仏、煩悩を断ずる処の故に、涅槃と名づく[三]」と。二には因に従って名を受く。謂く、智滅、或いは能く理を顕し、理、是の果を顕す。智滅を因と為し、因に従って名を立つ。理を名づけて滅と為す。此の経に言うが如く、「煩悩を薪と為し、智恵を火と為す。是の因縁を以て涅槃の食を成ず。我が諸弟子らをして、皆悉く甘嗜[四]せしむ[五]」と。

【現代語訳】

「択滅」と言うのは煩悩を断除することを意味する。仏の智慧は一切の煩悩を断ち切ることができるために、名づけて「滅」とする。もしこの意味によるならば、「涅槃」は滅（死ぬこと）ではない。そうであって、名が付けられるということには、簡略に言うと三つの意味がある。第一には「処」に従って名を得る。仏はとどまることのない根源を窮めている。この「処」は一切の煩悩を断ち切ることができる。煩悩を断ち切る「処」のために、名づけて「滅」とするのである。経文に言うとおり、「涅槃もまたそのとおりである。一定のとどまる場所がない。直接、この諸々の仏たちが、煩悩を断ち切る「処」であるので、名づけて「涅槃」とするのである。」と。第二には「因」に従って名づけられる。智の滅は、あるいは真理をあらわす。その真理はこの仏果をあらわす。智の滅を「因」として、その「因」に従って名を立てる。真理を名づけて「滅」とするのである。この経文に言うとおり、「煩悩を薪として、智慧を火として、それによって、涅槃という食べ物を作る。私の諸々の弟子たちに、みな全て食べさせるのである」と。

一　断除　煩悩を除くこと。

二　無住　もとづくもののないこと。よりどころのない状態。

三　『大般涅槃経』（南本）（『大正蔵』巻十二、p.757b ll.12~15）
「猶如世諦實無其性爲衆生故説有世諦。善男子。涅槃之體亦復如是。無有住處。直是諸佛斷煩惱處。故名涅槃。涅槃即是常樂我淨。涅槃雖樂非是受樂。」

ただし、元暁のテキストでは「直」が「宜」となっている。今、改める。

四　甘耆　たしなむ。

五　『大般涅槃経』（南本）（『大正蔵』巻十二、p.625c ll.9~12）

「所謂無常無我無樂。煩惱爲薪智慧爲火。以是因緣成涅槃食。謂常樂我。令諸弟子悉皆甘嗜。復告女人。汝若有緣欲至他處。」

元暁のテキストは「謂常樂我」を省略している。